No.105

春の大会、6月1日（金）開催！

News of WASEDA Architecture

CONTENTS

1 ［巻頭言］ローレンス・ハルプリンのスケッチ　矢口哲也
2-3 ［報告］エネマネハウス2017早稲田・芝浦工業大学共同チーム優秀賞受賞　丸山由香
［稲門の風❽］「環境」の可能性を再び手にするために　池原靖史
奈良県吉野材の活用を目指した継続研究――蔦屋書店で展示　湯之上純
4-5 漱石山房記念館の開館に寄せて　入江正之・和久田幸佑・早田大高
6-7 合同クラス会2017報告／OBによる仕事紹介・職域幹事会／「建築展」報告・「芸術展」報告
8 訃報／主な会務報告ほか

上写真はハルプリンのスケッチ原画
（撮影：矢口哲也）

早稲田建築ニュース
April, 2018

巻頭言

ローレンス・ハルプリンのスケッチ

矢口哲也
早稲田大学理工学術院
創造理工学部建築学科教授

研究室のスペースが広がり、手つかずのままになっていた一年前の引っ越し荷物を片付けることにした。書籍を詰め込んだ最後の段ボールを開封すると、一冊の懐かしい本と再会した。バークレー時代の恩師ドンリン・リンドンが編集したモノグラフ『シーランチ』だ。学生や若い設計者にあまり馴染みがないと思うが、シーランチは1960年代半ばにランドスケープデザイナーのローレンス・ハルプリンと建築家グループ、ムーア・リンドン・ターンブル・ウィテカー（MLTW）によって計画されたサンフランシスコ近郊の海岸沿いに位置する別荘コミュニティーで、ポストモダンの建築家チャールズ・ムーアの初期代表作、コンドミニアム1が建てられたことでも知られている。

パラパラと本をめくっていると（だから引っ越し荷物が片付かない）、ハルプリンによるスケッチ数点で目が止まる。ペンと水彩によるラフで味のある独特のスケッチ群だ。シーランチの計画でハルプリンは敷地調査に一年を費やし、多くのスケッチがこのときに描かれたと言われている。その内容は多彩で風向きや日当たり、植生、地形や眺望を詳細に記録した敷地分析のスケッチや、建物配置、屋根勾配の向き、土着的な納屋の形状や地元の材料等、後のデザインガイドラインの基になるものまで含まれている。当時ハルプリンが考えていたのは海岸の自然環境に負担をかけないコミュニティーデザインの手法で、現在の「サステイナブルデザイン」や「エコロジカルデザイン」と同じ系譜の考え方だ。現在ではコンピュータによる解析技術の発達で容易に環境シミュレーションを用いた計画を行うことが可能だが、50年前のハルプリンは自らの足で強風が吹きつける海岸線を歩き、キャンプを行いながら環境低負荷型のコミュニティーを構想した。

生前のハルプリンは、「スケッチは第二の言語」、「スケッチは設計の決断を下すときに使う内省的プロセス」と断言したそうだ。彼のスケッチは個人的な経験やアイディアを素早く描き留めたもので決して上手いわけではないのだが、スケッチとそこに書きこまれた補足のメモは雄弁で時間を超える強度を獲得している。

彼がスケッチに描いたコミュニティーの構想はデザインガイドラインの形で今日まで引き継がれ、シーランチは成熟したリゾート型のコミュニティーに成長している。

現在では設計のプロセスのほとんどが、コンピュータの画面上で完結するようになり、スケッチやドローイングを描く機会も随分と減ってしまった。製図台がない設計事務所は今や珍しくないし、これからも増えるだろう。しかし、本書に収められたハルプリンのスケッチを見ると、思考の過程や一瞬のひらめきを記録にとどめておくには、手描きのスケッチがいまだに有効な手段であると教えられているようだ。

ちなみに多くのハルプリンのインタビューやショートレクチャーが The Cultural Landscape Foundation のウェブサイト（*）にアーカイブされ一般にも公開されている。平易な英語で語られているのでぜひとも建築・アーバンデザインを志す学生には視聴してもらいたい。

※https://tclf.org/pioneer/lawrence-halprin

報告

［エネマネハウス2017］
早稲田・芝浦工業大学共同チーム 優秀賞受賞

この郊外の片隅に
――わたしと家の約80年のものがたり

■プロジェクト概要

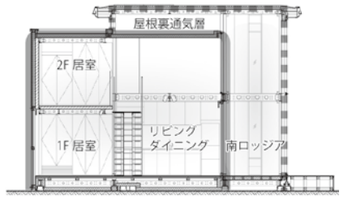
エネマネハウスは産学連携でネット・ゼロ・エネルギー・ハウス（ZEH※）のモデル住宅を提案、建築し、住宅の環境・エネルギー性能の測定・実証や、展示を通してZEHの普及啓発を行う大学対抗コンペである。三度目の今回は「LIFE DESIGN INNOVATION」をテーマに大阪で開催され、12月に一般展示された。早稲田大学は芝浦工業大学と共同チームで参加し、既存工業化住宅のZEH改修案を提示し、優秀賞を受賞した。

■コンセプト

築40年の工業化住宅の寿命を改修によって実質80年以上に延命させる、というコンセプトに基づき実験住宅を設計した。古い鉄骨造の工業化住宅は構造強度上の問題が無いにもかかわらず、簡易なリフォームでは現代の多様なニーズに応えるのが難しく、また大規模改修には複雑な構造計算が必要になるため、世代交代と共に取り壊しになるケースも多い。築30年以上になる工業化住宅は日本国内で200万棟以上建設されており、そのすべてが空き家予備軍であると言えるが、経済合理性のみに従って取り壊すのではなく、空き家を住宅ストックと捉えて活かす方法を探った。すでにある状況をよく観察し、工夫して使いこなすという、私たちの時代の感性にフィットする住まいのあり方の提案である。たとえば取り壊されるはずだった祖母の家を、孫の「わたし」が改修して住み継ぐ、それが郊外におけるコミュニティの再生や継承のはじまりになると考えている。

上：「わたしの家」既存住宅の面影が残る外観 © TakeshiYAMAGISHI
右：リビング・キッチン。自然光が入り広く見渡せる内観／左：チーム集合写真

1F Plan (S=1/200)



Section (S=1/200)

■建築概要

既存の外壁は気密性、断熱性が共に低く通常は環境性能が低いものと見なされる。しかし、エネルギー取得には有効であると捉え、既存外壁を単純に断熱補強するのではなく、高断熱の薄い新設壁を既存低断熱壁の内外を縫うように配置し、従来のリフォームでは不可能な、デザインの拡張性を獲得している。高断熱壁、樹脂複合サッシ、トリプルガラスの採用と設備の更新により、新設壁ラインの内部はZEHの基準を満たしながら同時に大開口の眺望も実現した。高断熱、低断熱（既存）の2種類の壁に挟まれた、エネルギー取得のための半外部空間は「ロッジア」と称し、季節や時間に応じてロッジア内外の窓を開閉することで、住み手が環境を微調整できるしつらえとした。ロッジア部分は既存低断熱壁が立面に現れ、かつての住宅の表情を継承するとともに、スチールサッシュがファサードに採用されたZEHの可能性を拓く建築となっている。

本提案住宅の環境設備の取組の一つとして、蓄電池とヒートポンプ給湯器の「蓄エネ」設備を、エネルギー管理システムによって制御し、太陽光発電と太陽光集熱による再生可能エネルギーを上手に使いこなすことを目指した。天候の変化や、都市のエネルギーマネジメントに対応可能な住宅とすることは、創エネ設備を搭載するZEHの今後の普及には不可欠である。

丸山由香（田辺研究室）

※ZEH：設計段階で年間一次エネルギー消費量の収支がゼロとなる住宅

チームHP：http://shibaura-waseda.tokyo/
早大（田辺研、高口研、林研）／芝浦工大（秋元研、志手研）他
主要構造：鉄骨造／延床面積：79.11m²／階数：地上2階／UA値：0.35 W/(m²・K)

稲門の風 ⑧

「環境」の可能性を再び手にするために

私が大学院生のころ、師が私に教えたことがある。曰く、『『環境』の概念が日本で紹介されたのは社会が総合に向かう1970年前後のことで、このとき『環境』は、建築のモダニズムにおける『空間』の前提を内に溶かし、超えていく可能性に開かれていた」と。

「環境」を実装するための情報技術が準備されたはずの今日、設計者はしかしまったく別の感慨を抱いている。――「環境建築」は何故、いつも決まってイマイチなのか。

技術は時代の制約を受け、早晩陳腐化する運命にある。歴史に学ぶならば、技術に使われるのを止め、技術と対峙する思想に目を向ける必要があるだろう。それはときにアンチエビデンシャルな領域に再び足を踏み入れることであり、「環境建築」の輪郭や解像度を問い直す姿勢である。

学生たちと共に半年かけて設計した「わたしの家」は、実質2週間の超短工期で建設され、短い一般公開を経て解体された。皆さまに今お見せできないのは残念だが、「技術が建築の確からしさを保証することはない」という訓示と濃密に向き合った月日が少なからず建築の質に結びついたと自負している。「環境」の可能性の何たるかについては、いずれ時間がくれば必ず、別の実作でお見せしたい。

池原靖史（エネマネハウス2017「わたしの家」設計協力／苗H19・院H21）

奈良県吉野材の活用を目指した継続研究――蔦屋書店で展示

「奈良の木」のあるくらし

古谷・藤井研究室では「奈良県庁農林部奈良の木ブランド課」と2010年以来継続して、奈良県吉野材（杉・檜）の活用を目指した継続研究・デザイン提案を行っています。

これまでもその成果を奈良県内や都内の様々な機会に発信してきました。今年度は11月16日から19日にかけて代官山蔦谷書店で『「奈良の木」のあるくらし～森からの贈り物～』と題して奈良県と蔦屋書店のコラボレーションによる大々的なフェアを行いました。特にT-SITE内のGARDEN GALLERY展示の吉野材製内装は古谷藤井研究室で計画したものです。

計画に先立って私たちは奈良県へ出張し、吉野材の美しさや香りの良さ、吉野林業の力強さを体感しその魅力を「普段吉野材に触れる機会が少ない代官山に訪れる方々へどう発信するか」を学生間で議論していきました。また工務店や家具デザイナーの方など様々な方に協力いただき、施工方法、予算や施工期間の調整も行い、大学で学んだことを実務として活かせる貴重な体験となりました。

最終的にできた展示空間は、ギャラリー内に奈良県産材でできた家型のフレームが複数入ることで場をゾーニングしました。吉野材でできたペンケース、名刺入れ、お皿などの販売を行う場、伝統的な吉野材の樽酒を試飲できる場、子どもと一緒に木材に触れることができる場が生まれ、奈良県の吉野材、林業の素晴らしさを都会の日常の暮らしの中で体感できる提案となりました。

会期中は、吉野スギで製作した「スギバイオリン」の演奏会や、木製バターナイフや木琴のDIYワークショップを行い、ご年配から子供連れの方々まで幅広い世代に開かれた空間となりました。

11月18日に古谷誠章先生がモデレーターを務めるトークセッション「奈良の木と森を育む森林業の未来」も開かれました。荒井正吾奈良県知事と村尾行一愛媛大学客員教授と共に、森を生かす人材の育成や、森の恵みを最大限に生かすための森林管理、木を使う豊かな生活を提供するために、奈良県が行っている取り組みなど、三者三様の立場から林業の未来について語られました。

スタッフとして学生もフェアに参加しましたが、来館者や書店の方々から、蔦谷書店内に吉野材と日本酒のいい香りがして心地よいと、嬉しい言葉をいただき、約9か月に渡り研究室で考えてきたことを空間として結実することができました。

湯之上純（古谷・藤井研究室）

左：展覧会会場風景／右：プロジェクトメンバー集合写真

芸術学校 新任教授・新任准教授の紹介

いながき・じゅんや
稲垣淳哉 准教授

1980年生まれ／2006年早稲田大学大学院修士課程修了／2007～2009年早稲田大学建築学科助手（古谷誠章研究室）／2009年Eureka共同主宰／2015年法政大学兼任講師／2017年早稲田大学芸術学校准教授。
2017年度より芸術学校に着任致しました。ASSEMBLEを新テーマに掲げる教育活動と、Eureka（エウレカ）での建築・地域デザインの活動を両輪として、今日における社会での建築の在り方を模索し、押し拡げていくことに邁進しております。

ほさか・たけし
保坂猛 准教授

1975年山梨県生まれ／1999年横浜国立大学建設学科建築学コース卒業、建築設計SPEED STUDIO共同設立・主宰／2001年横浜国立大学大学院修士課程修了（第8講座 山田弘康・北山恒）／2004年保坂猛建築都市設計事務所を横浜に設立／現在、早稲田大学芸術学校准教授。
2015年4月より早稲田大学芸術学校の准教授に着任し、これに伴い事務所を新宿区に移転しました。設計活動と教育活動ともに充実していけるよう取り組んでいく所存です。どうぞよろしくお願い致します。

はぎわら・たけし
萩原剛 教授

1961年生まれ／1985年早稲田大学大学院修士課程修了（池原義郎研究室）／1985年～竹中工務店／早稲田大学、東京工業大学、東京藝術大学、日本女子大学等非常勤講師歴任。
2017年4月より早稲田大学芸術学校の専任として着任しました。芸術学校は本年度より建築デザインに特化しつつ周辺領域との連携を拡張した新たなプログラムを実施します。早稲田建築の発展のために尽力する所存ですので宜しくお願いいたします。専門は建築計画、意匠・芸術論です。

漱石山房記念館
設計：入江正之・入江京＋フォルムデザイン一央
施工：菊池建設、日東電工、ミナト矢崎サービス、
　　日立ビルシステム
所在地：東京都新宿区早稲田南町７番地
敷地面積：1,114.79 m^2
建築面積：532.14 m^2
延床面積：1,276.14 m^2
階数：地下１階、地上２階
構造：RC+S造

写真・図面提供：DFI

南東側全景：漱石が「だらだら坂」と呼んだ前面の漱石山房通りから記念館全体を臨む

漱石山房記念館の開館に寄せて

入江正之先生を代表とするDFI（フォルムデザイン一央）が設計・監理された新宿区立漱石山房記念館が、夏目漱石生誕150周年となる2017年9月に漱石の終の住処である「漱石山房」跡地に建設されました。本誌では設計・監理に携わられた入江正之先生、和久田幸佑さん、早田大高さんからそれぞれの想いを寄稿いただきました。（南健太郎）

白い雲の終端に降りる鉛色の布

東側正面：「漱石山房」を包む本実出目地のRCフレーム

北側正面：約40mのガラススクリーンの面に小さな要素が浮かぶ

●一途に漱石に向けて

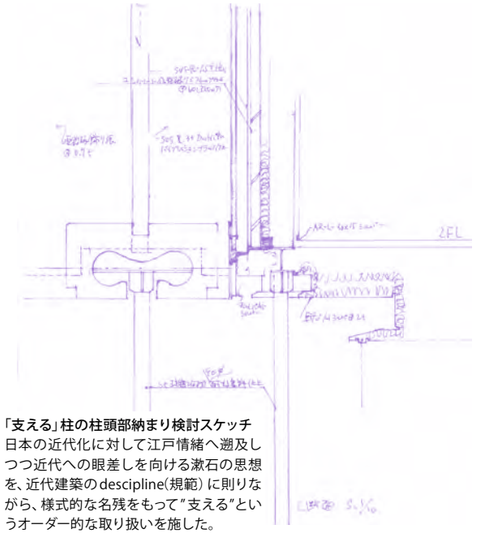
漱石山房記念館は漱石の終の住処であった早稲田南町の住宅を復元的に再現した書斎と客間（山房）を主要展示とする施設である。山房は漱石が硝子戸雨戸を設えたベランダ回廊が周囲に付されていた。この回廊南側部に籐椅子をおいて座しながら、目の前の芭蕉や木賊越しにだらだら坂と称した路地を、ながれる雲を、暮れなずむ空を眺めていたようだ。この漱石山房で著名なエッセイ『硝子戸の中』を著している。そこから漱石の日常が偲ばれるとともに、周縁とのつながりなども伺われる。身近に起こった具体的な事柄に触れた言説の奥に、世界を見とおす哲学や世界観のようなものが感ぜられてくる。エッセイの日常の表層と深奥へ眼を凝らすとき、突如次のような一節に出会った。本郷のあたり、雨で泥濘む路地を歩いているときのことだ。「私には私の心を腐食するような不愉快な塊が常にあった。」生身の漱石に出会ったように、はっとして心が動いたのを覚えている。山房再現の上に漂う雲の重なりから下りてくる、鉛色の布の表現はこのことに依拠している。漱石が雲は自由だ、と気持ちを寄せるその其処にこの言説は付着しているのである。漱石に向けての微かな意志の一つの表現である。

入江 正之
建築家／DFI・早稲田大学名誉教授
／苗S44・院S47

素材特性を活かし形態をデザイン。各部取り合いはその関係を徹底してデザインし納めた。

「硝子戸の中」から世界を観た漱石の視線を、軽く自立した「庭観窓」として表象した。

「支える」柱のディテール



「支える」柱の柱頭部納まり検討スケッチ
日本の近代化に対して江戸情緒へ遡及しつつ近代への眼差しを向ける漱石の思想を、近代建築のdescipline（規範）に則りながら、様式的な名残をもって"支える"というオーダー的な取り扱いを施した。

●納まりを彫琢する

「一途に漱石に向けて」という入江の言葉にある通り、当記念館の設計は漱石という対象と、建築家の内面との触れ合いの中で、いかに漱石を捉え、設計へと展開するかという繰り返しの中で行われました。「支える」柱の柱頭のディテールや庭観窓等、様々に表現するとともに、素材による扱い方、材の取合いや割付、角部の面の扱いなど、建築の造り込みにおいてはごく当たり前の事柄においてもそれは徹底して展開されています。ディテールは、空間に軽やかさや柔らかさ、鋭さや緊張感など、微かにその性質を決定付けながら空間の質を研ぎ澄ませますが、漱石がありふれた日常を言語によって彫琢することで小説作品にまで高めていったことと同じように、細やかに目配りをし細部設計を進めていくことそれ自身が漱石山房記念館を造っていく上での基本姿勢と認識し取り組みました。山房再現を取り巻く建築そのものは漱石の暮らした街並みに溶け込みながら、一方で建築の各部分が漱石との応答の中でデザインされることで、山房再現（漱石）を一層引き立てる建築として造り込むことができたと思います。

和久田幸佑
DFI元所員・和久田幸佑建築設計事務所代表／苗H15・院H18

南側に吊り上げられた展示室の筒越しに、「日常」の街並みを臨む

右：ベランダ回廊から「漱石山房通り」を臨む／左：地下１階北側ドライエリア

再現された漱石山房と一体になった現在の路地並み

●街並み総てが記念館

プロポーザルの公示を知ると同時に敷地へ赴いた。緩やかに上下する通りと、縦横に交差するその路地に、街並みが張り付いていた。初めの小さな模型を、故・池原義郎先生に見て頂いたときの感動を憶えている。改めて漱石を読み直す中で感得したことは漱石の眼がありふれた「日常」に向けられていることである。それは、研究室で取り組んだ「人間生活遺構」と相通じる思考でもあった。それから、当時の研究室学生たちと共に、連夜街並みを彫琢し、すべての設問に漱石の引用を当てた。現在の都市の中に、漱石の小説舞台を発見し描出した。それらの作業の過程で「漱石に依拠する」という漱石山房記念館の在り様が形づくられていったと思う。漱石の小説は、人物と並列に植物を扱う。植物が明確に場面を担っている。漱石の「日常」を追うと、精やかな植物の描写は、漱石自身が手を入れた庭の植物たちに負っていることが判った。漱石山房で書いた十編の小説からすべての植物を抜き出し、漱石山房の庭の再現と共に敷地全体に配した。植物たちが名を持った展示品として来館者の漱石世界を開く契機になることを願う。

早田大高
DFI・早稲田大学非常勤講師／苗H22・院H24・博H27

合同クラス会2017報告

11月4日土曜日に、大久保キャンパス（現西早稲田キャンパス）におきまして、「早稲田建築合同クラス会2017」が開催されました。昨年は、1967年に建築学科が大久保キャンパスに移転して50周年の年であったため、テーマはずばり「建築学科大久保キャンパス移転 50周年」としました。

シンポジウム・懇親会に多くの方にご参加いただきましたこと、また様々な方にご協力いただきましたこと、厚く御礼申し上げます。

（早稲田建築合同クラス会2017実行委員一同）

●第一部シンポジウム「建築学科 大久保キャンパス移転50周年」

大久保キャンパス（現西早稲田キャンパス）の現在までの50年の歩みを校舎の設計を中心に辿りました。

講演では、東京都江戸東京博物館研究員で建築史家であり、稲門の米山勇さんにお話いただきました。キャンパスができた当時の51号館を中心に、安東勝男先生の思い出から、建築史家としての視点で、建築作品としての形態分析・安東先生の作家論へと繋がっていきました。投影資料の中に「安東先生の生まれが1917年」とあり、今年は、キャンパス移転50周年と共に安東先生生誕100周年でもあったのです。この年に安東先生の建築作品をテーマに選んだことに稲門の見えない糸が繋がっている思いがしました。

講演に続き、現在のキャンパスのコーナーに建つ55号館、63号館の設計者の方々にお話を伺いました。鈴木恂先生のもと、55号館を担当された新棟設計室の海口平太郎さん、内木博喜さん、掛川美穂さんにご登壇いただきました。キャンパスの将来計画や安東先生のキャンパスの持つ中庭や動線計画をさらに推し進めた話題、今までになかった明治通り等との関係性、素材や色、学生集い場所への思いを語っていただきました。63号館は、久米設計の山本茂義さん、海老原靖子さんにプレゼンいただきました。将来計画を踏襲し、時代や社会のニーズから生まれた教室群や、安東先生のキャンパスのモデュールを踏襲したプラン、女子学生の増加など、設計を進めるうえでの課題や考え方をお話いただきました。

米山さん司会でのシンポジウムでは、時代のニーズに合わせ、稲門の方々が関わり進化していくキャンパスの姿がありました。ここで学ぶ方々が、キャンパスに関わった方々の思いを感じ、新たな稲門の歴史を築いていただけたらと思います。

上：第一部、建築史家で東京都江戸東京博物館研究員、稲門の米山勇さんによる講演風景。
中：米山さんの司会によるシンポジウム風景。
左から２番目より、鈴木恂先生のもと 55 号館の設計を担当された新棟設計室の海口さん、内木さん、掛川さん。63 号館の設計を担当された久米設計の山本さん、海老原さん。

●第二部懇親会「大久保キャンパスと一緒に生まれました」

50周年記念の年ですので、1967年製の50年ものワインで、みんなで乾杯。また、早稲田で知らぬものはいない応援曲「コンバットマーチ」も、この時代（1965年）に作曲されました。ワセオケの生演奏にて、「コンバットマーチ」から「紺碧の空」と懐かしの曲を聴きながら、各支部から送っていただいたワインや日本酒を片手に懇親を深めました。

最後は、4人中2人が女性という新鮮で迫力ある校歌とエールを披露していただき、稲門としての結束を強めた、なごやかな懇親の席となりましたこと、ご報告いたします。

（早稲田建築合同クラス会2017実行委員長／苗H3）

下：第二部懇親会の風景。ワセオケの生演奏にて、コンバットマーチ～紺碧の空。

OBによる仕事紹介・職域幹事・新年会

◎2017年度「OBによる仕事紹介」報告

稲門建築OBと学生がホンネで語り合う場の提供をコンセプトにしたOBによる仕事紹介が12月2日に開催されました。第一線で活躍するOBの仕事の様子を聴き、またOBと現役学生が直接対話することで、業種や企業をよく理解していただく絶好の機会です。当日は天候にも恵まれ、また事前に教室からの通知もしていただいたお陰で、前半の各業種代表の講義では約130名、後半では来場学生約170名と例年通りの盛況となりました。

第1部では13業種の分野から、代表OBが概要をわかりやすく説明し、学部2年生も含む大勢の学生が熱心に聴講しました。第2部では過去最高の60社の企業のブースが設置され、OBと学生の対話の場となりました。ブース来訪人数が550人ですので、一人平均3、4社は訪れたことになります。第3部の懇親会では各専門分野にテーブルを分けた立食で、満員御礼の賑わいで、さらに深い対話ができた様子でした。

次年度以降も学科教室や職域幹事などの意見を聞きながら、企画の改善、充実を図りたいと思います。最後に休日にもかかわらず、ご参加いただいたOBならびに教室関係の皆さま、本当にありがとうございました。

上：第1部、各業種代表OBによる講義。
下：第2部、60社の企業ブースが設置されOBとの対話の場となった。

◎2017年度「第2回職域幹事会・新年会」

第2回稲門建築会職域幹事会及び新年会が、2018年1月26日に55号館1階大会議室にて開催されました。職域幹事会では各企業職域幹事が出席し、大内政男会長に挨拶いただきました。各委員会からの活動報告、合同クラス会幹事から開催報告、長谷見雄二副会長から日本建築学会代議員・常議員選挙候補者の案内がありました。またOB仕事紹介についての意見交換も行いました。

その後、56号館地下1階の生協カフェテリアに場所を移し、新年会が開催されました。曽田五月也教授から研究室の長年の研究について紹介いただき、非常に興味深い内容でした。新年会は大内会長の挨拶・乾杯を皮切りに約50名が参加しました。恒例のアジア視察会の報告をいただき、旧交を温めました。校歌熱唱の後、渡邊大志准教授・会員委員会理事の挨拶で閉会となりました。

※それぞれの肩書きは開催時のもの。

和出知明（会員委員長／苗S58）

建築展 報告

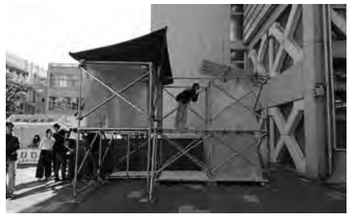
2017年度の建築展は「みなでつくる1分の1」というコンセプトを掲げ、全3回のワークショップと小学校プロジェクト、その集大成として、理工展での展示を行いました。

第1回はイスを題材に「腰掛ける」のデザインを、第2回では窓を題材に「仕切ること、繋げること」のデザインを、第3回では畳を題材に「座す、寝る」のデザインを、考えていきました。小学校プロジェクトでは「新聞紙ひみつきち」と題し、新聞紙でつくった棒でトラス構造の「家」を小学生と一緒に作りました。

そして集大成としての理工展では、「1分の1住宅」を設計、施工しました。ここでは、これまでのワークショップで培ってきた1分の1スケールでの空間デザインに加え、これからの都市における住まい方という大きなテーマにも挑戦しました。ベッド、トイレ、お風呂、キッチン、当たり前のように家の要素として思い浮かぶこれらの機能は家の外にも用意され、それらを誰もが利用できる時代になっています。この現象を「住宅（機能）の解体」として捉え、都市に住宅機能が点在する時代に、「家」になる何か、それを皆で考えてつくりました。1分の1スケールから都市スケールまで、異なるスケールの横断の中でデザインすることに挑戦できたと思います。

エスキスしていただいた顧問の小岩先生、活動資金を援助していただいた稲門建築会の皆さま、ありがとうございました。

平林航一（建築展代表／建築学科3年）



右上：第１回WS「腰掛ける」。リートフェルトのRed&Blueをリデザイン。
右中：第２回WS「窓」。窓と、それに付随する空間性の考察。
右下：第３回WS「座して半畳、寝て一畳」。茶室の空間性を学びながら、小空間における視線や姿勢をデザイン。

左上：小学校プロジェクト「しんぶんしひみつきち」。新聞紙を丸めた棒をトラスで組み、小学生が思いのままに様々な形の「ひみつきち」を製作。
左中：理工展「1/1住宅」。鉄パイプで足場のような仮設的な骨組みを構成し、その中に波板や金網を使って部屋を製作。
左下：理工展「1/1住宅」。鉄パイプと波板、金網の収まりのディテール。

芸術展 報告

芸術展は、毎年11月初旬に行われる早稲田大学の文化祭と共に行われる、芸術学校生の展示・発表の場です。例年、学生有志による「企画展示」と授業で制作された作品を学年ごとに展示する「課題展示」を実施しています。

今年度の企画展示では、西早稲田キャンパス内中庭にて、ストリートファニチャーにより場をつくることを試みました。文化祭という祝祭の喜びの日に、その経験をさらに強めるような、来場者皆さんが憩い語らう場所をつくることをその主眼とし、満足のいく結果が得られたと考えています。

この制作過程においては、協力して物事を進めることの大切さと難しさ、話し合うことの大切さを感じさせました。そんな中で何よりも大きかったことは、つくることの喜びです。それも皆で協力してつくることの喜び。それはかけがえのないものでした。

唐澤徹（芸術展代表）

課題展示
中庭ストリートファーニチャー

講評会風景

春の大会ご案内

今年の春の大会は2018年6月1日（金）。例年通り、西早稲田理工キャンパスにおいて、通常総会、特別講演、懇親会が予定されています。

今年の特別講演は、亜細亜大学都市創造学部教授であり、また日本を代表するゲームクリエイターであるサイトウ・アキヒロ先生に、先生が提唱されている「ゲームニクス理論」と、その建築やまちへの応用可能性についてお話しいただく予定です。

サイトウ先生は広告会社でキャリアをスタート、20代前半でいくつかの広告賞を受賞する中、1984年23歳のとき、後に任天堂4代目社長となる岩田聡氏（2015年没／享年55歳）と出会い、当時プログラマーだった岩田氏に「一緒にゲームを作って任天堂に売り込みにいかないか」と誘われ、そのゲームが任天堂に採用され、その後30年以上にわたり数多くのゲームディレクションに携わることになります。その1984年からの約30年は、当時まだ玩具を作る京都の小さな会社であった任天堂が、世界の「Nintendo」へと成長する歴史に他なりません。

サイトウ・アキヒロ氏

「ゲームニクス」とはサイトウ先生によるネーミングで、先生はその理論の根底には、日本の「おもてなしの心」があると言います。ゲームニクスとは「ユーザーのメンタルな立場に立って、ゲームにいかに前向きに遊んでもらえるか」という緻密なノウハウであり、それは「ユーザーのメンタルな部分を先回りして、さりげなくそっと差し出す」という日本人なら誰もが持っている「和」の心、「さりげないおもてなしの文化」であると。そしてこの「ゲームの面白さの秘密＝ゲームニクス」を応用すれば、世の中はもっと便利にもっと楽しくなるはずだと。

特別講演では、サイトウ先生のゲームニクス理論に触れていただき、建築やまちの見方・考え方について少しでも刺激を持ち帰っていただければと思います。OB・OGおよび学生の皆さま、お誘い合せの上、ぜひ春の大会にお越しください。

浅見邦一（事業委員長／苗S62）

合同クラス会予告

毎年恒例の「早稲田建築合同クラス会2018」の準備を、平成4年卒業生有志が中心になり進めています。

開催日は、例年理工展が開催される11月3日（土）に、場所は西早稲田（理工）キャンパスを予定しています。

私たちが大学1年生のときに平成が始まり、そして平成最後の年に合同クラス会の幹事を務めさせていただくことになりました。04卒生200余名の、30年間の建築経験と知恵とアイディアを集結し、次の時代につながるステキな企画にしたいと考えております。

秋の青空のもと、理工キャンパスで皆さまにお会いできますのを楽しみにしております。

名取万理子（合同クラス会2018実行委員長／苗H4）

寄付金

萱会第8期同窓会（代表 吉澤幸雄様、渡邊齊様）より、11/4付けで 87,521円 いただきました。

訃報

下記の方がお亡くなりになった旨、事務局にお知らせいただきました。謹んでご冥福をお祈りいたします。　2017.9.1～2018.2.28受付分

石渡雅男（苗S03）逝去日不明	久野 新（苗S38）H29.12.30
石井泉二郎（苗S23）H29.5.4	平野嗣明（苗S38）H17.2.28
伊藤 學（苗S27）H29.10.9	中根 淳（苗S39）H29.8.25
大川 昭（苗S27）H27.4.17	日根野孝之（苗S41）H20.8.12
小菅 昇（苗S27）H29.3.30	岡田 哲（苗S42）H29.7.9
大明義昌（苗S30）H29.12.4	升永 忠（苗S45）H29.4.28
神守孝司（苗S30）H29.6.21	西川恭資（苗S48）H29.12.18
竹内正志（苗S30）H22.2.21	早川和男（苗S56）H29.11.6
大澤義行（苗S31）H29.7.13	増井弘隆（苗H06）逝去日不明
関根正省（苗S31）H29.6.15	香川正弘（院S47）H25.5.4
小川 敦（苗S32）H29.1.23	菅 恒一（友S03）逝去日不明
谷口 亮（苗S32）H28.8.19	瀧野 計（友S30）H23.7.3
関川満男（苗S33）H29.7.2	秋谷幸男（友S48）H29.6.6
瀬島 畯（苗S34）H23.3	原 利治（工S11）H13.12.2
佐久間俊次（苗S35）H29.8.4	佐藤英男（工S16）逝去日不明
木村 肇（苗S36）H15.3.6	増島太郎（工S23H29.10.6
石川雄蔵（苗S37）H29.8.22	南條新五（甍S16）H17.8.20
杉山喜信（苗S37）H29.7.27	平石誠郎（甍S18）H29.2.12
宇賀孝男（苗S38）H29.6.15	上田常徳（甍S20）H29.8.31

主な会務の報告　2017年10月～

■会議

- ●第3回理事会…11/17
- ●第2回職域幹事会…1/26
- ●特別功労賞選考委員会…3/2
- ●企画運営会議…3/2

■活動

- ●講演会（三浦丈典氏）…10/18
- ●秋の大会／合同クラス会…11/4
- ●建築展、芸術学校展支援…11/4,5
- ●見学会（漱石山房記念館）…11/11
- ●OBによる仕事紹介…12/2
- ●設計製図Ⅲa-1、Ⅲa-2、Ⅲb課題公開講評会（支援）…11/18,1/13,1/23
- ●特別見学会（ボロブドゥール）…1/6～1/10
- ●新年会…1/26
- ●建築学会代議員・常議員立候補者支援…2月
- ●学部・大学院卒業パーティー（会長祝辞、稲門建築会賞授与）…3/24
- ●芸術学校卒業式（副会長祝辞、稲門建築会賞授与）…3/24
- ●芸術学校入学式（副会長祝辞）…4/1
- ●大隈講堂新入生ガイダンス（副会長祝辞）…4/18
- ●メールマガジンの発行…11,12,1,2,3,4月号
- ●イヤーブックWA2018、ニュース105号発行…4/15

News of WASEDA Architecture No.105
2018年4月15日発行

発行者＝稲門建築会会長：大内政男
編集者＝稲門建築会広報委員会
（委員長：竹部友久）

発行所＝稲門建築会
〒169-8555
東京都新宿区大久保3-4-1
早稲田大学55号館S棟2階
TEL. & FAX. ＝ 03-3208-0640
HP＝http://www.toumon.arch.waseda.ac.jp/
Email＝toumonji@poppy.ocn.ne.jp

制作＝株式会社建築メディア研究所
デザイン＝長島恵美子

©稲門建築会

編集後記

広報委員長の重責を引き継いでから、早いものでもうすぐ2年が経ちます。その間、機関誌WA2つと早稲田建築ニュース4つを無事発行できたことは、安堵の思いとともに、取材や寄稿に応じて下さった会員の方々、並びに広報委員会の皆さんのご協力の賜物であると改めて感じております。広報委員会の活動を通して、早稲田建築は学生も含め優秀で多種多様な人材の宝庫であると実感しました。広報委員長は退きますが、稲門建築会の益々の発展を祈念しております。

竹部友久（広報委員長／苗H1）

事務局便り

私が事務局長になってから10年が過ぎようとしています。この間、建築学科と芸術学校から約2500名の卒業生を出し、その分稲門建築会の会員も増えて、物故者を含めると約27000名になりました。一方、卒業の際には新たな住所を登録してもらっているにもかかわらず、通信可能な方は約12000名と毎年ほぼ一定です。年間に届けられる訃報は約80ですので、毎年約170名が名簿上の行方不明者になる計算です。転勤、引っ越しなどの異動に伴う住所変更の連絡がなされないからです。稲門建築会の使命の根幹は会員との連絡を確実にすることです。そのためにも、また諸事を行うにも、皆さんの一層の協力が欠かせません。

大木紀通（事務局長／苗S42）